

語源

曼荼羅とは、サンスクリット語の「マンダラ」を、そのまま音写した言葉。

曼陀羅という書き方もあるが、曼荼羅と書くのが歴史的に正式な書き方。

意味

太陽や月は円形をしており、漢語では、「日輪」とか「月輪」と言い、インドのふつうの文献で、この日輪とか月輪とかを意味するものとして、マンダラという言葉がよく用いられている。

ここからさらに進んで、マンダラは「円」一般をさすようになった。さらに、軍隊とか集団とか、ともかく「一団」となっているものを意味する。

また、古くからインドでは、修行をするさいには、自分のまわりに円を描き。これは、悪魔によるさまざまげを退けるため、いわゆる、結界をつくると言う意味であり、マンダラには結界という意味もある。

これらの事から、大日如来を中心にその「まわり」を、仏さまや菩薩さまなどが、あたかも大日如来を「飾りつける」

かのように、ぐるりととりまいてあるさま、これが曼荼羅であるといえる。

サンスクリット語で「マンダ」は「真髓」を「ラ」は所有するを意味し

真髓を所有する

本質を有するもの

完成されたもの

種類

一口に曼荼羅といっても、じつにさまざまな種類がある。

しかし、日本の密教では、もつとも基本的なものは、胎藏曼荼羅と金剛界曼荼羅であり。このふたつは、大日如来を中心に、当面考えられるありとあらゆる諸尊をならべたもので、そのため普問曼荼羅とか、都会とえの曼荼羅と言われている。

また、そうした包括的な曼荼羅の一部、たとえば釈迦如来とそのとりまきの諸尊だけをとりだした、数多くの曼荼羅もある、これは、別尊曼荼羅と呼ばれている。

これらの分類とはまた別の分類もあり、四種曼荼羅ししゆと呼ばれ、描きかた、表しかたがちがうもので。

1. 大曼荼羅

白・黄・赤・黒・青の五色をもつて、諸尊の姿をそのまま描いたもので、尊像曼荼羅とも言う。

2. 三昧耶曼荼羅

三昧さんまゐ耶や

諸尊の印相と持ちもの（三昧耶形、略して三形）だけを描いた曼荼羅のことで、金剛界曼荼羅の一部をなす三昧耶会などがある。

3. 法曼荼羅

諸尊のそれぞれの印となつてゐる種子（古いインドの文字で梵字とか悉曇文字）を書きこんだもので種子曼荼羅ともいう。

4. 羯磨曼荼羅

絵画ではなく、立体的な像で諸尊を表現したもの。

高野山根本大塔に大日如来と四仏と十六の柱に描かれてゐる。

胎蔵曼荼羅

正確には大悲胎蔵生曼荼羅と言う。

母親の胎内に眠る胎児のような人間が、本来もつてゐる仏性の種子が仏の慈悲によつて目覚め、育ち、命の花を大きく開かせ、悟りという実を結ぶ過程を描いたもの。

この曼荼羅は『大日経』にもとづいたものである。

『大日経』には、一切智智（仏）は、

1. 菩提心を因とし

菩提心とは、さとり（菩提）を求めようという心をさし、きよらかで深い信心のこと、これがなければいかなる人物でも、さとして仏になることはできない、つまり、

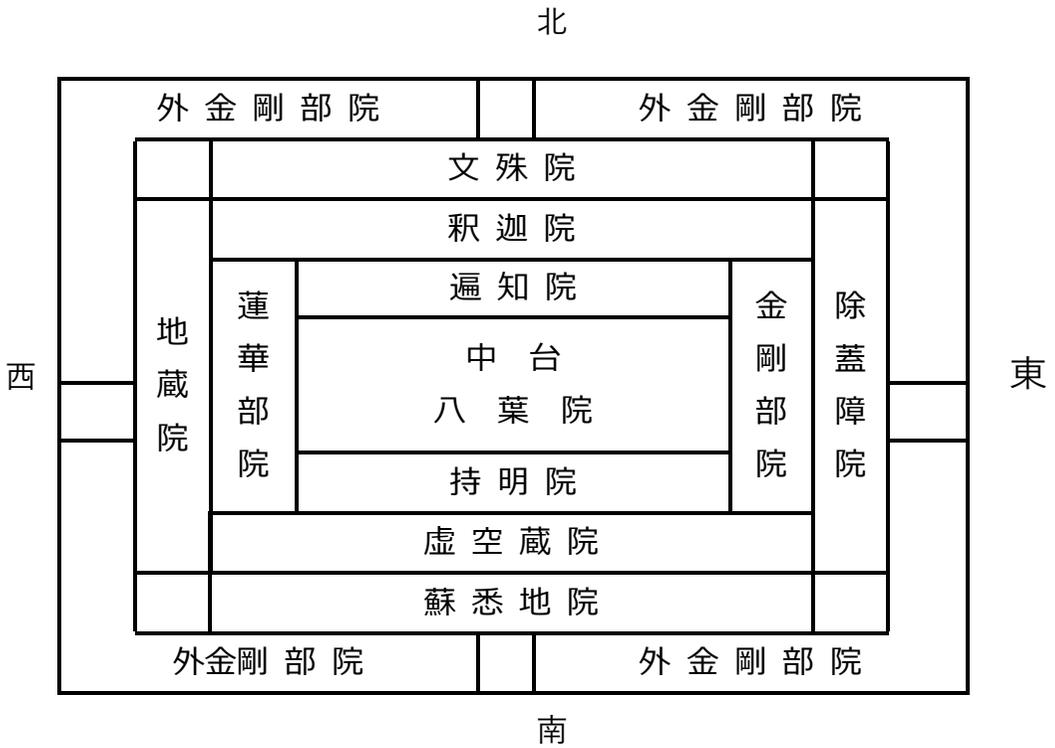
菩提心とは仏になるための素質（仏性）のことであり、本来すべての人にそなわつてゐるとされるものである。

2. 大悲を根とし

大悲とは、絶大の悲と言ひみで、悲とは、慈悲の悲のことで、無条件に苦しみを救つてあげようとする事。

3. 方便を究境となす

方便とは、真実にいきなり衆生を導くことがむずかしいときに、なんとかして真実に近づけようとするために立てる仮の教え。と説かれてゐる。これは、ふつう三句といわれている。『大日経』の教えは、この三句に集約されると考えられてゐる、結局、胎蔵曼荼羅も、これを表現したものである。



曼荼羅構成

一番下の基礎にあたる
 第一層は 外金剛部院（最外院）
 その上の

第二層は 文殊院・除蓋障院・蘇悉地院・地蔵院

第三層は 虚空蔵院・釈迦院

第四層は 遍知院・金剛手院（金剛部院）・持明院・
 蓮華部院（観音院）

第五層は 中台八葉院

空海の秘密曼荼羅十住心論は

動物のような一番低い心から最高位の密教的人間の完成までを、曼荼羅を十の段階に分けて具体的に説いている。

- 第一住心 .. 異生羝羊心（いししょうていようしん）
- 二 .. 愚童持齋心（ぐどうじさいしん）
- 三 .. 嬰兒無畏心（えいじむいしん）
- 四 .. 唯蘊無我心（ゆいうんむがしん）
- 五 .. 拔業因種心（ばつごういんしゅしん）
- 六 .. 他縁大乘心（たえんだいじょうしん）
- 七 .. 覚心不生心（かくしんふしゅうしん）
- 八 .. 一道無為心（いちどうむいしん）
- 九 .. 極無自性心（ごくむじしゅうしん）
- 十 .. 秘密莊嚴心（ひみつしょうごんしん）

第一層 外金剛部院

人間に生まれた意味を問いかけてくる。

東西南北の門から、地上の人々を招きいれる

一番外で最外院とも言う、ここは、仏教を守護する天（神）

や竜や夜叉が二百一尊もならば、その中心は次の八尊で、

護世八方天と呼ばれる。

東―帝釈天

東南―火天

南―焰摩羅天（焰摩天、つまり閻魔大王）

西南―涅槃帝王（羅刹天）

西―水天

西北―風天

北―毘沙門天王（多聞天）

東北―伊舎那天

第一段／そんなにしたい放題でいいのか

（欲望に拡大鏡をあてる）

南面西よりの隅にいる。死鬼から三体の仏をはさんで東隣に同じく薄暗がりがあり、そこに九体の飢えた人間の姿をした群れがある、それを毘舍遮という。

自分の空腹を満たすためなら、生きた人間を殺し、その肉を食う。

第二段／ほんの少し欲望を控えてみると・・・

（足りるを知って足りない人に与える）

毘舍遮と死鬼の間にいる三体の仏で、拏吉尼天で仏のようだが、右手に人間の足、左手に引きちぎった腕を持っている、その両脇の仏は血盛りの皿を手をしている、最初は人を殺して食べていたが、大日如来にとがめられ人の死を半年前に知る術を授かり、死後の肉を食するようになりおぞましさは毘舍遮と変わりないが、自分の空腹のために人を殺すことはしない、欲望をちょっと控えることで、人間らしい心が芽生え出てきて、仏の座をつかんでいる。

第三段／いつまでも母の膝にとどまれない

（仮の安らぎを蹴って真実へ）

東門の近くに大梵天に出会う、この仏の全身は

ヒンズー教の最高神ブラフマンで、ヒンズー教は輪廻の考えが柱で、この世は不遇でも、次の世は、より上の階級に生まれ変わろうとする。よりよく生きようとして、人間を超えた超能力とか神の光にすぎり、道徳的に暮らすのも悪くないが。自分を変えるための鍛錬を怠り、宿命に甘んじるならばつらい努力もなく気楽である、母親の膝に乗っている幼児のように安らいでいるが、人はいつまでも仮の安心に浸るのではない。人間を超え、た力を信ずるのは宗教心の始まりである。

第二層 文殊院・蘇悉地院・地蔵院・除蓋障院

自分を磨いて世界を広げていく

○ 文殊院

観音と普賢菩薩を両わきに、文殊菩薩を中心に計二十五尊からなる。

○ 蘇悉地院

四波羅密院ともいわれ、とくに主尊はない、孔雀明王

・十一面観音

菩薩など八尊よりなる。

○ 十一面観音

○ 孔雀明王

○

○

○

○

第四段／ものごとにとらわれすぎない（問う姿勢が真実への扉を開く）

文殊菩薩は訪れて来た者に、自分がこれほどの智慧を身につけることができたのは、經典に象徴される釈迦の教えを積極的に聞き、それを実行したからだと告げて、その姿勢こそが大事なのだと教えてくれる。

文殊菩薩は悟りの母（覚母）呼ばれ、求め、聞く姿勢の確かさ。

（どう生きるかを問いつづける）（大きな耳でよく聴く）

○ 地蔵院

地蔵菩薩を中心に計九尊からなる。

○ 除蓋障院

除蓋障菩薩を主尊として計九尊からなる（除蓋障菩薩は地蔵院に居られる？）。

第五段／自然は啓示に富んでいる（感受性をみずみずしく

保つ）

感受性を磨くことで他人の悩みをわがことのように哀れみ、煩惱の障害をお互いに取り除こうと教えている。どんな事態になってもじたばたしない、容易に人を当てにしない豊かな感受性と不動の独立心。

訪れた者を、まず自然界にむけさせる。

感受性を研ぎすまして自然界をみると、そこには人生の真実を教える姿がいろいろなに秘められている。そこから何が真実で、何が人を苦しめるかをとともに学ぼうと呼びかけてくる。

第三層 虚空蔵院・釈迦院

相手を思いやるゆとりを持つ

○ 虚空蔵院

虚空蔵菩薩を中心に北の千手千眼観音菩薩、南の金剛

蔵王菩薩など、計二十八尊からなる。

第六段／与えることによるこびを感じる（施して見返りを

期待しない）

中央の虚空蔵菩薩の上方に並んだ十波羅密菩薩の

十人が全員、口を開いて大声で叫んでいる。

迷いの世界から悟りの世界に至る修行の仕方を、まるで歌うように説いている。

布施（ふせ） .. 恵まれない人に施す

持戒（じかい） .. 約束事を守る

忍辱（にんにく） .. 耐えていく

精進（しょうじん） .. 目的に向かって努力を続ける

禅定（ぜんじょう） .. 心を鎮めて真実を見る

智慧（ちえ） .. 正しくものを見て判断する

○ 釈迦院

釈迦如来を中心に大迦葉・舍利弗などの仏弟子など計三十九尊よりなる。

第七段／極端に走らない（暮らしにほど良い緊張を）

これまでは、一切の物事は因縁によって形をなす、固定した実体はないと説得されてきたが、この段では、それを発展させて自分に対するとらわれからも自由になる。しだいに老いていく。病気にかかる。そうした苦しみは生きていくこと自体の苦しみを増し、先には死の苦しみが待っている。その上に愛する者ともわかれねばならないし、反対に気にいらぬ者と生活をともにしなければならぬ。

欲しいものは思うように手にいらぬし、自分にこだわる限り何もかもが苦になっていく。

この苦しみから逃れ出ようとあがいて、かえって自分を失ってしまうほど打ちのめされる、現実の一切は苦だと認識する、その上で静かな瞑想によって解決していく。この苦しみも原因ときっかけによって生じている。それを空といい、原因かきっかけかのどちらかが消滅すれば苦から自由になれる。

苦行に溺れず、そうかといって放逸に流されず。そうして、「一切は空なり」の真実にたどりつけと釈迦は説いている。

第四層 遍知院・金剛手院・持明院・蓮華部院

自分の心をありのままに見る

○ 遍知院

一つの印と六尊からなり、ぶつちいん 仏母院とも言う。

中央の炎をあげている、三角形が一切如来智印・一切遍知印・三角智火などと呼ばれ、すべては空であるということにまつわる、三種類の仏の智慧を表す。

この左となりに仏眼仏母（般若仏母）がおかれている、般若は仏の智慧のことで、仏を生みだすもと仏の母を表す、よつて、仏の智慧を表している。

「七俱胝仏母」「仏限仏母」「一切遍知印」「大勇猛菩薩」「大安樂不空真実菩薩」

○ 金剛手院

金剛薩埵を主尊に、ほぼ三列に計三十三尊がならび「金剛部院」「薩埵院」とも言う。

仏の智慧が、金剛（ダイヤモンド）のように堅固であることを表す。

○ 持明院

五尊が横一列に並んでいるので、五大院とも言う。

左から「勝三世明王（降三世明王）」「大威徳明王」「般若菩薩」「降三世明王」「不動明王」
仏の智慧が煩悩を断つ力を示す。

○ 蓮華部院

聖観音・馬頭観音・白衣観音・不空罽索けんそく観音などを中心に計三十六尊を、ほぼ三列におさめているので別名観音院とも言う。

これは、仏の智慧から発する宏大な慈悲を表している。ほとんど人間的な完成が実現する層である。

金剛手院は、ほとんどの仏が右手に、原形は武器の五鈷杵ごこしよを持つ手いる。

持明院は、剣と綱と炎で煩悩を鎮める。

蓮華院は、手につぼみの蓮華を持ち、心をこめた優しい説得。

遍知院は、智慧の光を来訪者の心の中に届けて邪念の闇をなくす。

戦・剛と和・柔でそれぞれの特技を生かして人間の最後の鍛錬に余念がない。

第八段／だれも等しく、心は清浄だ（お互いに尊敬し、尽くし合おう）

煩悩を控えて、一切が空だと見る修行の果てに、ありのままの尊さに気がつき、こうして苦勞して階段を登っていく

ること、人の心はもともと清浄なもので、みんなが等しく成仏できるということに理屈を超えて共鳴できるようになる。絶対的な平等にからだが目覚める。

静かに瞑想することで自分もまわりの人も、それに宇宙全体も、もともと清浄なものだと知ることができる。

こうして自分の心があるままに知ることができれば、それはもう悟りと呼べる。

第九段／宇宙の一切に仏のいのちが宿る

(人間の意志を超えた調和がある)

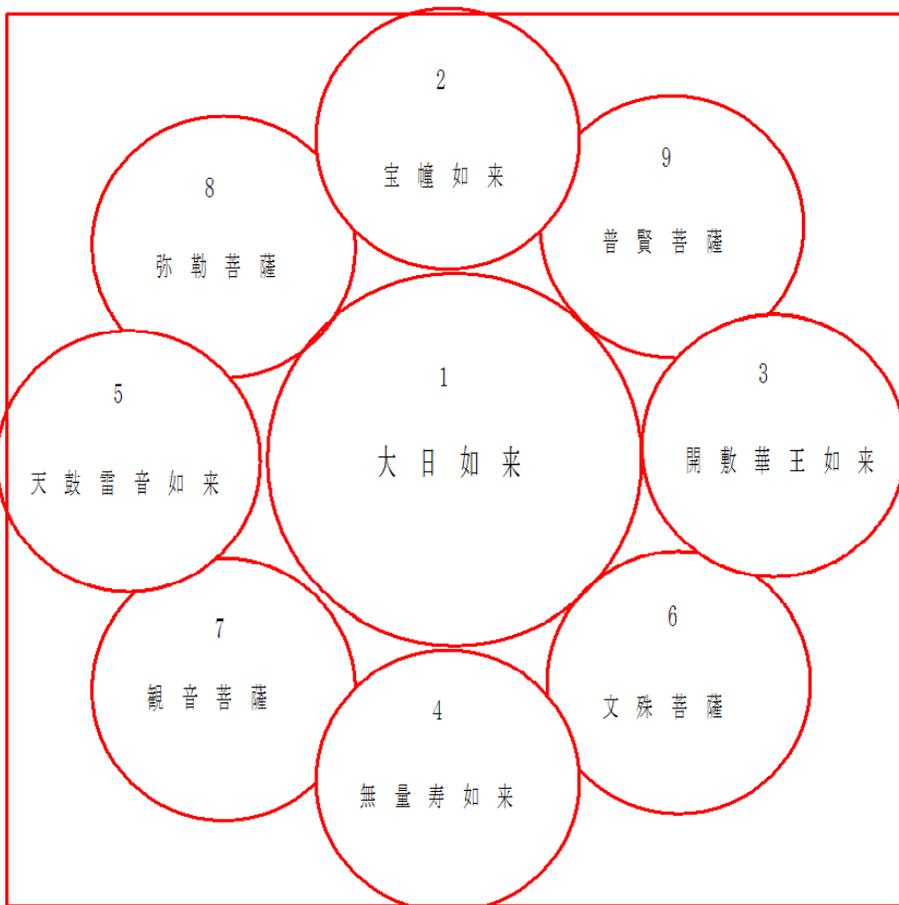
自分の心をありのままに見ることができて、そして清浄さにおいて、ありのままであることが宇宙の真実と同質だと分かれば、もう十分だが、はたして、その認識が本物か？ わたしという一人の人間が大きな宇宙的な規模の秩序の中に位置づけられ、しかも宇宙的な規模の中に溺れてしまっていないか。

わたしというのは小さな一点だが、澄みきった池の面が万物を映すように全体をきちんと視界に納めているか。

特に一切遍知印は、一木一草にいたるまで一切の物に宿っている仏の智慧を感じとれるか、その智慧によって一切が調和している宇宙と自分の宇宙を重ねることができるか、そう問うている。

第五層 中台八葉院

わたしでしかないいのちが息づく



1. 宝幢如来 普賢菩薩 (すがすがしい闘い)

仏の智慧を宝の幢はたであらわし、仏道修行の出発点(因)

である菩提心の位を示す。

2. 開敷華王如来 文殊菩薩（とらわれを断つ）

つぼみであった仏の智慧が開花した（開敷華）かたちを現したもので、大悲行の位を示す。

3. 無量寿如来（阿弥陀如来） 観自在菩薩（苦しみを引き受ける）

衆生を救済する姿を現したもので、証菩提の位を示す。

4. 天鼓雷音如来 弥勒菩薩（目覚めの衝撃を）

雷のように大きな声を発して説法につとめる姿を現し、入涅槃の位を示す。

5. 大日如来（宇宙と一体になる）

密教の世界の中心にいる仏の中の仏さま（太陽・宇宙そのもの）。

毘盧遮那仏（奈良東大寺の大仏）

大日如来と一体化することで、生き通しのいのちをえる、入我我入。

一、怠け心を取り去って精進する。

一、自分のとらわれ（我執）を断つ。

一、人の苦しみを引き受ける。

一、人々に安らぎを与える。

第十段／仏とは安住しない心である（仏の心にも餓鬼は住

みつづける）

この生きたからだのままに成仏できたわけだが、それも固定したものでなく、怠け心を起こしたら、たちまちに第一段の毘舎遮のもとまで落下してしまう。

一般の仏教でも「悟れるに悟りなし」といい、自分は悟ったと思った瞬間、一つの立場に固執したことになり、無常の真実に逆らったことになる。

最高の心の位に達しても煩惱の殻を被っているかわり、餓鬼のような状態にあるときでも、仏の要素はきっちり備えている。それが分かっていたら有頂天になれないかわりに、仏にまで見放された絶望感に落ち込むこともない。

自分の心が餓鬼に引きずられているか、仏に引きずられているかを醒めて判断する。それは、大日如来と一体化することで、自分を超えたところから届けられる力が加えられて、はじめてつかめる心の状態である。

大日如来の智慧の力をからだに迎えて、自分らしい生き方を十分に表現する。

← 毘舎遮 .. 動物みたいに欲望を抑えられない、したい

← 放題の人間。

← 拏吉尼天 .. 足りるを知り、施す喜びを知る人間。

← 大梵天 .. 人間らしく、宗教心にめざめるが仮の安心

に溺れる人間。

← 文殊菩薩

..まじめに仏法を聞き、教え通りに生きようとする人間。

← 地藏菩薩

..豊かな感受性を磨いて、自然の中に無常の眞実を見れる人間。

← 虚空蔵菩薩

..心は自由になり、大衆を救うことに心を砕きはじめた人間

← 釈迦如来

..一切のものも、自分も、もともと空と知って自分にとらわれない人間。

← 聖観音菩薩

..人は等しく仏になれると知って、尊敬し合える人間。

← 一切遍知印

..宇宙にある一切の物に、仏の智慧が宿るところを知っている人間。

← 大日如来

..自分らしさを十分に発揮し、自己完成を達成した人間。